

目的 人工島の高層住宅街区では、計画的に建設された環境の中で子どもの全生活が完結するため、住区内の遊び場が子どもの生活に及ぼす影響は大きく、その設計の重要性は一般の団地とは比較にならないものがある。六甲アイランドシティのすでに入居している4つの街区は、それぞれに設計者が異なり、それぞれの特徴をもっている。この4街区の遊び場の比較観察から、設計計画が子どもの遊びや付添いの親の行動に、大きく影響を与えている状況を明らかにし、高層住区の遊び場デザインに対する示唆を得ようとした。

方法 調査時期は「そのⅠ」と同じ。六甲アイランドシティ内の4つの街区内遊び場と地域内の児童公園2か所と高架下リバーモールの計7か所で、終日、定時に、遊んでいる子どもの数を読み、遊びの状況、付添いの状況の観察を行った。

結果 基本的には幼児は自分の住宅から一番近い遊び場で遊ぶが、信号のある道路ひとつ隔てていても、魅力のある公園があればそちらに出向く。この場合の遊び場の魅力を決定する条件は、砂場および幼児向け遊具（ブランコ、すべり台など）の有無である。さらに、夏には日陰があり、冬には日当たりの良いという条件が加わればいっそう良い。条件の良い遊び場に人が集中する一方、こうした条件に欠ける遊び場はまったく人がいない状況になる。高層住宅の場合は、付添う母親が連れ出すため、遊び場を選んで遠征するので、とくにこうした選別化が進む。オートロック内に安全な遊び場がある街区では、付添い無しで遊ぶ子どもが観察され、前記条件を確保すれば幼児向けのもっとも良い遊び場が完成する。5、6才児でも、住棟入口付近から見通しのきかない遊び場は不人気である。